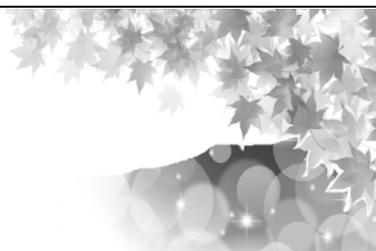


第12号

2018年9月

きらら坂

関西セミナーハウス活動センターだより



デザイナー・ベビー

小久保 正

かねてより動物や植物の品種改良に遺伝子改変を用いることは行われてきた。しかし、従来の方法では、思い通りに改変することが容易でなかった。2012年にクリスパーキャスナインと呼ばれる遺伝子編集技術が開発され、狙った遺伝子を壊したり、狙った遺伝子を置き換えることが容易にできるようになった。この技術はすでに筋肉量の多いマダイヤ、収量の多いイネの開発に用いられようとしている。

この技術を、ヒトの受精卵に使うと、親の望む外見や知力、体力などを持たせた子どもを得ることが出来る。親がその子どもの特徴をデザインするかのようであるので、それらの子どもはデザイナー・ベビーと呼ばれる。そのような試みが世界各地で始まっているという。愛知県岡崎の基礎生物学研究所教授の中山潤一さんを関西セミナーハウスへ招いて、この技術の現状と問題点を語って頂いた。中山さんは、2017年に発行されたポール・ノフラー著「GMO sapiens The Life-Changing Science of Designer Babies」(丸善出版)の翻訳者である。

中山さんによれば、この技術を用いて遺伝子操作を行うのに必要なDNAや酵素はインターネットで容易に入手できる。受精卵を入手できれば、分子生物学的実験ができる施設であれば、それにこの遺伝子編集技術を用いて遺伝子操作を行うことが出来る。それを代理母に移植し、胎内で育てれ

ば、遺伝子操作を施した子どもを得ることができる。

ただし今のところ、狙った遺伝子に意図と異なる改変を行ってしまったり、狙ったのと異なる遺伝子を改変してしまったり、予測と全く異なる遺伝子操作を行ってしまう場合もある。しかもその間違いは、子どもが胎内である程度大きく育ってからしかわからない。

そもそも子どもの遺伝子操作は、健康を向上させ、人間性を向上させるのに役立つと主張されるが、親には子どものゲノムを編集する権利があるのか、優れているとは何を意味するのか、特定の性格や能力は生きるに値し、他は生きるに値しないと誰が決めることができるのか、などの問題がある。

しかも遺伝子操作された子どもの遺伝的特質は、代々引き継がれ、その特質を持った人が増えていく。

この発題の後、参加者から、自分は遺伝子操作などされずに自然のままがいいという意見が出された。しかし遺伝子操作を求める動機には、少しでも他人より優位に立ちたいという願望がある。人がこの願望から自由にならない限り、遺伝子操作への誘惑を断ち切れない。

中山さんがその講演を次の言葉をもって終わられたのは、印象的であった。

「私たちの人生の豊かさは、私たちの不完全さによってもたらされる」

◇おさそい◇

11月1日(木) 13:30~16:30

「聖書をいっしょに読みましょう」⑦

座長 榎本 栄次(関西セミナーハウス活動センター所長代行)

11月3日(土) 16:00~4日(日) 12:00

「今、外国人技能実習生は～私たちの社会と人権」

講師 早崎 直美さん(RINK すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク事務局長)

11月10日(土) 13:30~17:30

「往きの医療vs帰りの医療

—わたしたちはどんな死に方をしたいのか?」

講師 島田 宗洋さん(救世軍清瀬病院名誉院長)

11月23日(金) 9:00~16:00

関西セミナーハウス「もみじまつり」

お茶席三席、箏演奏、お弁当

所蔵作品企画展「アジアで描かれた聖書の世界」

フルートとピアノによる「日本四季を楽しむコンサート」

など お待ちしています。

✧ なんどきですか ✧



「私たちの人生の豊かさは、
私たちの不完全さによってもたらされる」

(中山潤一氏)

出合い

厳寒の冬を越すから 春がうれしい

暑い夏だから一杯の水がうまい

悲しいから優しさを知る

淋しいから親しみがわく

畏れがあるから赦しが有難い

思い通りにいかぬから祈りを覚えた

僕がつまづいたから 友よ、君に会えたのだ

(榎本栄次)

投稿 きらら俳句

- 蝸の止みし林の静寂(しじま)かな 公女
- 秋の日にこの道たどりし君は亡く 枯骨
- 台風を迎えて簾阿波踊り 小次郎
- 秋蟬のいつしか止みにし夕べかな 周豊
- 夏が行く影が日を追う朝の道 海楽
- あの中にうちの子もいる去ぬ燕 洋子
- 虫の音に厨(くりや)の音の途切れけり 茶香
- 彼岸花咲きてホームに母を訪う 岳
- 夏去りて砂浜蟹の独り占め 虚舟

関西セミナーハウス活動センターへの

賛助会費・寄付金

2018.7.1-8.31 順不同・敬称略

竹中 百合子、村上 みか、小山 稔・初美、網野 俊賢、丸山 まり子、山本 知恵、植村 敏子、奈倉 道隆、桜井 希、八杉 恵、關岡 一成、織田 雪江、阿部 志郎、大谷 光真、堀口 こみち、山本 知恵、藤田 恭子、東 千代、遠藤 勇、都木かおり、関西青年アシュラム、日本基督教団西が丘教会、修学院一日アシュラム

ありがとうございました。

関西セミナーハウスの四季だより 恋の季節

関西セミナーハウス庭園担当 榎 廣光

日本庭園の草むしりをしていると、音羽川の谷あいの奥から突然「ピーッ！」という甲高い鳴き声が聞こえてきた。しばらくするとまた「ピーッ！」と。まるでソプラノ歌手のような歌声。紅葉鳥(もみじどり)だ。紅葉鳥とは秋のもみじの頃の鹿のこと。秋に鳴く鹿の声を鳥の鳴き声にたとえたものだ。この鳴き声は雄鹿の熱いラブコールの歌声である。これから11月初めごろまで鹿の繁殖期である。

鹿は非常に繁殖力が高く、1歳になれば出産可能で毎年出産するようである。近年鹿の生息数が急増し、農林被害が深刻化している。原因は天敵であるオオカミの絶滅や戦後の若い人工林(杉や檜の植林)が鹿の餌場になったことである。これも人間の為したことに對するしっぺ返しだ。また鹿を初め野生の獣類に付着するマダニには人を死に至らしめる感染症の病原体を有するものもいるようだ。

きらら山莊界限にも時折 鹿の親子連れを見かけることがある。奈良公園では人と野生鹿が共存し、古くから神の使いとして保護されている。人が知恵を出し、有効な対策を講じてお互いが一定の距離を保ちながら共存すればと願っている。